みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# 「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第17巻 京都文化論



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 千里文化財団<br>公開日: 2013-02-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 吉田, 憲司<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10502/00009290 |

第17巻

# 京都文化論

＊梅棹忠夫の京都案内　＊京都の精神
＊日本三都論

関西財界人を対象とした梅棹忠夫の大阪での講演会に同席したことがある。確か、一九九七年のことであったのではないかと思う。講演会の冒頭、梅棹はこう切り出した。

「大阪は商都と呼ばれる。あれは、東京の連中が、大阪をおとしめようとしていい始めたことです。大阪は、昔から、文化都市であった」。会場からは、拍手がおこった。

梅棹の発言は、いつも意表をついて始まる。東京については、東京都文化懇談会の席上で、「東京はひとつの地方なのである」といい、「永遠の開発途上都市」と断じた。

そして、京都。「きっすいの京都人」を自任する梅棹は、「七〇年代の観光京都のビジョン」という講演で、「京都は観光都市ではございません」と言い、京都は首都型の産業構成をもつ情報産業都市であると明言している。

『京都文化論』は、梅棹の京都をめぐる三部作『梅棹忠夫の京都案内』『京都の精神』『日本三都論――東京・大阪・京都』を収めている。東京・大阪についての議論も含まれているが、その視座はあくまでも京都との比較にあり、関心の中心は京都におかれている。その京都を、梅棹は徹頭徹尾、「絶対最上級」の特別な土地として位置づける。それを梅棹自身、「京都中華思想」とよんではばからない。しかも、それは単に、日本人の心のふるさと、京都という、ありふれた認識から出ているのではない。そこには、梅棹ならではの比較文明論の裏づけがある。

梅棹は、すでに四半世紀も前、現在みられる西洋文明のグローバル化と、それに伴う各地域の異質な文明の部分システム間の摩擦を予言していた。そして、西洋的秩序に最初の衝撃を与えたのが日本だといい、さらにその「異質化のエッセンス」を今も温存しているのが京都にほかならない、と述べている。預言者・梅棹忠夫の慧眼に改めて驚かされるとともに、梅棹の「京都中華思想」が、たんなる出生地へのこだわりでなかったことに気づかされる。同じく、京都に生まれ、京都に育った私にとっても、改めて目を開かれる「京都文化論」である。（吉田憲司）